

## 巻頭言

巻末で報告したように、現代文芸論研究室出身の邵丹さんの著書『翻訳を産む文学、文学を産む翻訳』（松柏社）が2022年度のサントリー学芸賞を受賞した。本学に提出した博士論文を書籍化したものだ。

邵丹さんは中国からの留学生で、当初、村上春樹研究を目指していた。とあるBSのテレビ番組に、村上春樹を求めて地元中国でのキャリアを捨てて勉強に来た人物と紹介されたこともある。そこには少しばかりの誇張というか、テレビ的演出があったかもしれない。ともあれ、村上春樹研究から始めた邵さんは、試行錯誤の末に1970年代の日本の翻訳状況を叙述する方向に向かった。この転回は遠回りに見えるかもしれないけれども、結果的に当の村上春樹らの登場の素地が作られた時代状況を説明することになる。藤本和子らにインタビューするなど地道な努力の末に彼女の研究は実を結び、それによって学位を取得し、それを著書として世に問うて受賞と相成った。

こうした邵さんの研究の軌跡は彼女の後に続く現役学生たちにもひとつの教訓的な示唆を与えてくれるかもしれない。研究は時に迂回を必要とするということだ。村上春樹が好きで彼を研究したいと思ったからといって、村上春樹を論じなければならないというわけではない。回り道をした方が村上春樹作品の理解にはずっと益し得ることもある。

特に博士論文のような長大な論考は、たとえ村上春樹を直接に扱っているものでも、時に迂回しながら議論を展開する必要も出てくるだろう。それによって厚みが増す。もっとも、そこまでいけば果たしてそれは迂回なのか、と問う向きもあるかもしれない。あるいは逆に、全ては迂回なのだということも可能だ。文化は迂回によって成り立つ。

スペイン語で何かを直截に話題にすることを *ir al grano* と言う。粒（種子）へ向かうのだ。一方、迂回し、一見無関係な話題にかかずらうことは *andar por las ramas* と言う。枝を歩き回る。つまり枝葉末節、ということだろうが、小さな種に向けて行くよりも枝のひとつひとつを見て回った方が樹の大きさがわかるというものなのかもしれない。

柳原 孝敦